

## 聴いて観て、世界を五感で味わう

T. M. Hoffman

大の忠義、蜜蜂の働きなど、動物に見習うこととは沢山ある。6年間滞在したインドでは、動物と人間が街に共存していることを、席で感じた。

混雑している道で牛がのんびり過している姿を見ていると、人間と同じように自らの食、安全、道楽などを得るために、彼らが五感に頼って情報を集めているのに気づく。そして、それぞれの動物たちが独自にその視・聴・臭・味・触の発達をみせる。視力の鋭い鷹、聴力に優れている鼠、臭覚の鋭い犬がいるとすれば、人類の中にもこうして「得意な感覚」というものがあるのだろうか。あるとすれば、動物の場合、その特徴が生まれつきなのに対して、人間は育てられる環境や個々の経験が決定的なのである。例えば、建築家が目で空間を把握し、指揮者が耳を商売道具にする、調理師は味覚・臭覚を中心とするなど、それぞれの活躍する場が要求する感覚を研ぎ澄ます。

世界の諸民族にも、長い歴史を経ていずれかの感覚が優先的に磨かれてくると考えられる。各民族の言葉は、五感とどういった関係が見い出されるのだろうか。香水の産地で話されるフランス語は、鼻音が著しいのは偶然なのか。また、日本語の場合、沢山含まれる同音異義語の識別に欠かせない漢字の存在を考えれば、視覚に頼る割合が大きい。日本語は漢字、仮名、ローマ字、数字、記号などと、紙上に表される形は数々に上る。

このように、日本語は、多様な文字風景が目を楽しめるのに対して、発音は極めて少ない。金田一春彦によると、日本語の使われている音

節は、112だけである。一方、北京語は約1200、インドのヒンディ語には2万余りの音節が発音されていることで、インド人が外国語に強いということは十分うなずける。

文字はだれの手にも届きやすいが、録音技術が普及されるまで、外国語の発音は日本列島にほとんど届かなかった。今現在でさえ、固有名詞までも、外国語の発音が日本人には許されず、外来語として扱われる。一音節発音である名前「Smith」は三音節の「スミス」となり、原音とはかけ離れた発音になる。いわば、アジア大陸や欧米に比べれば、日本は音に対してかなり保守的な文化に見える。

外国語を問わず、日本古来の音節が、時を経て少なくなってきたとも考えられる。89の万葉仮名が平安時代に古典の50音、そして現在の46音となった。

日本では音楽も邦楽やインド、中近東の豊富な表現法（微分音程など）が、西洋音楽で育てられた耳のために敬遠される結果となっている。多様な音を聴かせる世界民族音楽、そして多様な発音を含む外国語の両方を大学生に楽しんででもらいたい気持ちで民族音楽の講義をした。演奏や言葉の仕事しながら、音による経験の枠について考えている。

交流や情報交換の多い現代に益裁、普通など幅広く発達してきた日本の伝統的な静文化に誇りを持ちながら、耳を通じて世界各国の音との出会いをより広く楽しめようになればとおもう。

(T. M. Hoffman・演奏家/教育家)

## 体育と音楽が教えるもの

T. M. Hoffmann

車を用いられれば、すぐ短時間で長距離の移動ができる。有料道路を使用すれば、その走行空間に対して支払うべき料金が決まってくる。また、電話を使うと、音声が届くまで届き、その使用時間に対して料金が定まる。現代においては、お金を出したらそれぞれの空間と時間の使用権が得られるのだが、自動車や電話など、今日までの技術発展は、空間と時間そのものの本質をよく考えた古代の哲学者・教育者・芸術家の子孫である。

古代ギリシヤは学術・芸術・技術の基礎作り発祥の地と言われている。つまり、後世のヨーロッパ大陸のそれぞれの文明の柱となった哲学的あるいは数理的原理の礎を築いた文明であった。古典時代 (BC550-330) のギリシヤの思想家達は、空間と時間それぞれの属性を明瞭に把握した上で、科学と芸術とのつながりも考察した。その一人、宗教改革者でもあった数学者ピタゴラス (582-500BC) は、いわゆる、「ピタゴラスの定理」を始めとし、掛け算九々の表および音楽における協和的音程の比数も発見した。

また、概念的な大哲学者プラトン (427-347) は、重要な具体案も出した。例えば、ある一定の音階であるドリア技法が、社会の道徳・平安を促進するとみなして、その音階を広く使い聴かせるように指示した。ちなみに、ギリシヤの第一技法とされたそのドリア技法の音階は、現在北インド音楽で「ラーガの女王」と呼ばれるほど愛好されているラーガ・バイラヴィーや日本の雅楽の曲に最もよく使われる調子である「平調」と同じ音階でもある。

紀元前4世紀に空間と時間の特性を論じたアリストクセノスによると、絵画・彫刻・建築は「観照的」なものであるのに対して、詩・音楽・踊りは「実践的」、前者は空間に存在するのに対して、後者は時間に存在する。目によって一瞬に把握できる「観照的」なものは、すでにできあがっている作品として空間に静止状態の存在を代表する視覚的現象である。一方、詩の朗読と音楽・踊りの演奏の「実践的」なものは、時間の流れの中における動的な性格が問題である。

空間を実感するのに、古代ギリシヤの教育に欠かできなかった科目は体育であった。三次元の空間を自らの身体で経験することで、幾何学などの学習を深く理解する類となるのである。従って、体育が重視されたギリシヤで始まったオリンピックは、勝負の競技よりそこに大きな意義がある。

音楽は時間のことを理解するための必須科目となっていた。例えば言葉の長短母音から生まれた詩脚体系に基づく古代ギリシヤのリズム法は、音と音の間に現われる様々な時間区を体験させて、数理的な比や均衡の発見に導く、と考えられていたのである。

体育と音楽は心身の健康、さらに発見と創造の育成に最適である。人間の生活環境の枠となる空間と時間に精通する手段でもある。今日、学校や社会で体育と音楽の価値がどこまで認められているのであろう。

(T. M. Hoffman・演奏家/教育家)